HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	対外主権のない状態における議会政の確立 ： 同君連合期ノルウェーのストルティング
Author(s)	中村, 研一; Nakamura, Ken-ichi
Citation	年報 公共政策学, 16, 23-45
Issue Date	2022-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84830
Type	departmental bulletin paper
File Information	16-05_Nakamura.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【特別寄稿】

対外主権のない状態における議会政の確立
―同君連合期ノルウェーのストルティング―

中村　研一*

ノルウェーは、英国・スイスと並び、安定した議会制民主主義を発展させた国として、ロバート・ダールら多くの政治学者から注目されてきた[1)]。

1536年、ノルウェーはデンマーク国王の植民統治下に置かれた。これはデンマーク＝ノルウェーの「同君連合」（デンマークが優越しノルウェーが半従属する状態）と呼ばれた。

1814年、ナポレオン戦争末の戦乱と混沌のなかで、デンマークは敗戦国となった。そしてノルウェーは戦争の敗者であるデンマーク国王との「同君連合」から切り離され、戦争の勝者であるスウェーデン国王との「同君連合」（スウェーデンが優越しノルウェーが半従属する状態）のもとに置かれた。端的にいえばノルウェーは、16－19世紀の間、軍事主権も外交主権もない半従属領域として、1814年、デンマークからスウェーデンに譲り渡された。このスウェーデンとノルウェーの「同君連合」は1905年まで続く。1536年～1905年の間、ノルウェーは短い例外を除き対外主権をもたなかった。

ナポレオン戦争末期の1814年前半、ノルウェーの普通の人々が、この国の議会（コンスティチューション）＋憲法をつくった。アイツヴォル憲法制定会議が行われ、ノルウェー議会ストルティングが開設されたのである。ただしノルウェーの人々が対外的に独立していたのは、1814年の数カ月に過ぎなかった。その数カ月のわずかな隙間に、急いで議会（コンスティチューション）＋憲法をつくった。その後の1905年まで対外主権のない状態下であったが、ノルウェー人の代表たちは議会制民主主義の創造力を発揮させたのである。

ノルウェーの政治学者シュタイン・ロッカンは、この「ノルウェーの議会（コンスティチューション）＋憲法は将来の発展に向けての地平を開いた点で驚くべきである」と評している[2)]。その言葉

＊　北海道大学名誉教授

1）　たとえばR・A・ダール『デモクラシーとは何か』中村孝文訳、岩波書店、2001年、Harry Eckstein, *Division and Cohesion in Democracy; A Study of Norway*, Princeton University Press,1966はアメリカ政治学からの先駆的研究例。

2）　Stein Rokkan,'Norway: Numerical Democracy and Corporate Pluralism,' in Robert Dahl, ed., *Political Oppositions in Western Democracies*, New Haven, Yale University Press,1966, p.369.

通り、ノルウェー人たちは、彼らの母国がデンマークからスウェーデンに譲り渡されるきわめて短い月日のうちに議会（コンスティチューション）＋憲法を確立した。そしてその後91年間、対外的に主権がない状態のもとで、ノルウェー議会に選出された代表たちは、議会制民主主義の能力を発揮させ、数々の政治的な改革を実現した。内政に限られてはいたものの自己決定に向けて開かれた議会（コンスティチューション）＋憲法を発展させたのである。

ノルウェーの歴史家ロルフ・ダニエルソンは「1814年とそれ以後は、三百年ぶりに、一つのノルウェー国家という存在に向って枠付けられた」[3)]と述べている。対外主権をもたないで、対内主権の制度的礎石を築き、議会政の創造力を発揮させた。しかもそれらを運営したのはノルウェーの普通の人々であった。

そして1905年、ノルウェーは、スウェーデンとの「同君連合」からの離脱を平和裏になしとげた。対外主権のない状態から脱却したのである。さらに1913年にはヨーロッパで最初に男女の普通選挙を実施したことで知られている。いずれも難事であったに違いない。

小論は、なぜノルウェーの普通の人々が、軍事力も外交力も事実上ない状態のもとで、どのような条件のもとに議会（コンスティチューション）＋憲法を確立できたのか、を検討する。

そして1814年以降、ノルウェー議会（ストルティング）は、機能を拡大しつつ、議会政の本領を発揮しはじめる。小論は1884年議会革命および1905年のスウェーデンからの分離独立（「同君連合」の解消）については、紙数の関係上、要約的に触れるに止める。

1. 普通の人々による議会政

ほぼどこの国でも、議会の建物は高くみえる。イギリスのウエストミンスター宮殿の時計台「ビッグベン」は、実際に非常に高い（約96m）。また日本の国会議事堂も、建てられた1936年には、日本で一番高い建物であった（66.45m）。

より重要なことに、議会という言葉は、〈権威の高さ〉を感じさせる。日本国憲法は国会を「国権の最高機関」、「唯一の立法機関」と定める。国会に付された「唯一」も「最高」も、他の機関に勝る権威を表現している。イギリスの報道機関はビッグベンを、日本では国会議事堂を、政治的権威を示すイコンとして用いている。

議会が権威の〈高さ〉を感じさせるのであれば、そこで活動する議員もまた〈権威ある存在〉に違いないという類推が働く。議員はたとえば「国民代表」と形容されるではないか。では「国民代表」とは一体どんな人なのか。

〈高さ〉を印象付ける議会から一人の議員が現れる。ところがこの議員は、わたしたちとまったく同じ普通の人なのである。議会の建物や権威の〈高さ〉の一方、議員のこの普通さには虚をつかれる。

---

3) Rolf Danielsen et.al., Trans by Michael Drake, *Norway: A History from the Vikings to Our Times*, Scandinavian University Press, 1995, p. 219に引用。

日本の国会議員の場合、胸に議員バッジさえ付けていなければ、あるいは、派手な服装・所作によって「政治家らしさ」を発揮さえしなければ、彼ないし彼女を誰も国会議員とは気付かない。

この議員の〈普通さ〉は、日本の国会議員だけが感じさせる印象ではない。英国の下院議員も、ニュージーランド議員も、ノルウェー議会（ストルティング）の議員も、自分が普通の人であることを強調する。議員の第一印象は、一般人と区別のつかない等身大性にある。「普通の人がする議会政が民主主義である」と思い知らされる。

「普通の人々がする議会政が民主主義」というのは、常識である。ただし問題が残る。政治的な行為をする主体である議員の普通さと、議会の権威の〈高さ〉の間にあるギャップである。疑問は次の二つに分けられる。

第一の問いは、「はたして普通の人々が、権威の高い議会政を構築することができるのか」である。「普通の人々がする議会政」は政治的な白紙状態のなかで構築されるわけではない。議会政が確立される前には、国王や貴族や武人や宗教者たち、すなわち「特別な（普通でない）人々」が、「普通の人々」よりも高い権威をもって、法を維持し、措定していた。しかも、これら「特別な（普通でない）人々」は、高い権威だけでなく、その背後に暴力／実力をもっていた。それら暴力／実力は、「特別な（普通でない）人々にとって、法維持の手段であり、法措定の保障体であった。「普通の人々」が議会政を確立しよう試みるとき、眼前には「特別な（普通でない）人々」の高い権威と暴力／実力が立ち塞がる。

以下**1**ではノルウェー議会（ストルティング）を構成したのが「普通の人々」であったことを示す。

また**2**では、ノルウェーを支配した「特別な（普通でない）人々」として、1814年におけるデンマークとスウェーデンのそれぞれの王太子を取り上げる。

第二の問いは、「はたして普通の人々が、議会政を運営することができるのか」である。この問いについては、**3**で、19世紀半ば以降の議会政の発展を要約的に述べることにする。

1.1　ノルウェー議会（ストルティング）

ノルウェーの首都オスロ（旧称クリスチャニア）のカール・ヨハン通りの小高い「ライオンの丘」に、ノルウェー議会（ストルティング）はある。以下、ノルウェー議会と意訳せず、ストルティングと記すことにする。

西暦600年から1000年ごろまで、スカンジナヴィアの各地では、「ティング」と呼ばれるヴァイキング・自由民の集会・民会が、垂直に立てられた巨石に囲まれた空間で行われていた。

「ティング」は古英語 thing と語源を同じくし、「民会・集会」あるいは「集まると約束した時と場」と訳せる。人々は約束した時に、その場に集まった。そして、議論し、紛争を解決し、法を決め、宗教を変更した。ときには王を選出し、承認すること

もあった。「ストル」は「大きな」の意である。したがって、ストルティングを直訳すれば「大民会」となる。[4)]

欧州各国の議会議事堂といえば、たいていはかつての王の宮殿か城である。その建築を任された人は、その全能力を注いで、建物の攻撃されにくさ、権威の高さ、近寄りがたさを表現した。通常は、屹立する議事堂は通常周囲の空気を圧している。なお日本国会議事堂の衆参両院を左右対称に配した横長の構成は、中央の階段ピラミッド状の屋根と頂部の高さを強調している。「遅れて出現した新古典主義といえ、ナチス・ドイツの様式に通じる」と建築家・丸山茂は評する[5)]。

ところがノルウェーの議事堂は、宮殿でも城でもない。外壁は円形である。サイズは小さく、つつましい。「大きい（ストル）」という名の与える印象とは異なる謙虚な佇まいである。明るいグレーの御影石と黄色のレンガの色調も周囲にマッチしている。

ストルティングは、1814年というナポレオン戦争末期に開かれた。この時は、ノルウェー人にも多くのヨーロッパ人にも歴史の決定的瞬間であった。そのときノルウェー人（25歳以上の資産ある男子に限定された。）たちは各地で選挙集会を開いた。そこで選挙された112人の代表はどこに集まったのか。憲法制定会議が開かれた場所は、商人兼官吏のカーステン･アンカーの私邸であった。

爾来開催されたストルティングは、どこに集まったか。大学のホールなどを間借りした。議会の場としては、権威の〈高さ〉の誇示と正反対であった。

ノルウェーの首都・クリスチャニア（オスロの1924年以前の名称）の中心街カール・ヨハン通り一帯の設計がスウェーデンの新進建築家に委ねられた。「カール・ヨハン」とは1814年当時のスウェーデン王太子（後述）の名である。王宮（国王とは通常はストックホルムに住むスウェーデン王）とともにこの議事堂も1866年に建てられた。ノーベル平和賞受賞者は、1901年以来、このストルティングの委員会が選考・決定する。そのたびに、この丸く穏やかな建物は世界中の TV 画面に映し出される。以上の記述はすべて1905年以前のノルウェーの出来事であり、ノルウェーは、スウェーデンとの「同君連合」（実質的な半従属領域）であったことを確認しておく。

ストルティングの建物の内部は「広々とし、機能的であり、英雄的雰囲気とはかけ離れている」[6)]。そのなかで唯一政治的なメッセージ性をもつ巨大な絵が、本会議場の議長席の背後に掲げられている。立ち上がっている一人の男が語り、大きめのホールを埋めたたくさんの人々が椅子に座って聞いている。その描き方はいかにも普通の人々であることを印象付ける。絵の中の人々は「英雄」らしくはなく、普通の人々として描かれている。アメリカ合衆国の建国神話が「建国の祖」たちを英雄視するのと

---

4)　R・A・ダール『デモクラシーとは何か』中村孝文訳、注１）に同じ、24頁。

5)　丸山茂「国会議事堂」『平凡社大百科事典　５巻』平凡社、1984年、955頁。

6)　Donald R. Matthews and Henry Valen, *Parliamentary Representation: The Case of the Norwegian Storting*, Columbus, Ohio State University Press, 1999, p.52.

は正反対である。これは、いったい何を描いた絵なのか。

1.2　共同体性

これまでノルウェーの人々を「普通の人々」と呼んできた。ノルウェー人の「普通さ」には、長い歴史と、政治文化的な背景がある。それらを以下要約する。

ノルウェーの地理は南・西を海に囲まれ、北は北極に面し、東は峻厳な山岳地帯である。人々は広大なスカンジナビア半島の東北沿岸部に分散して住む。人口密度は低い。ノルウェーの多くの共同体は、複雑な海岸線にできた細長い湾フィヨルドの沿岸に位置する。（古代ノルド語の vik は湾・入江・フィヨルドの意。ヴァイキングとは「ヴィークの人々」の意。）陸路は断崖絶壁のような峻厳な地形のため、海路が外界とつながる輸送・交通の唯一の手段となった。その海路も海が荒れれば閉ざされた。

11世紀ごろには、ノルウェーが領域として他から区別されたものという意識が成立した。ただし14世紀中葉の「大危機の時代」、黒死病に襲われるなどしてヴァイキングの王や名家の有力者、上層階級は、衰滅してしまった[7)]。

「大危機の時代」を生き伸びた人々の間では、共同体的な絆が強く意識された。都市も農村も、共同体の絆が、人々を結びつけた。ヴァイキング社会では、共同所有と共同責任が強調された。一方で共同体内の人間関係の緊張は低く保たれた。共同体内では非競争性が尊重され、その他方で共同体間では高い攻撃性があった。共同体と共同体外との緊張はたえず大きかった。共同体からの追放は、ほぼ死を意味した。共同体内で年齢差、キンシップに基づく社会編成、機能上の差異は生じたが、その差異をできる限り少なくしようとする平等主義的傾向がたえず働いた。

この共同体的特徴を残したまま、社会関係は複雑に分化していく。政治学者ハリー・エクシュタインは、ノルウェー社会の特徴を、共同体の機能化された関係が社会構造に転化する点に求め、それを「プリモーディアルな社会（原初共同体の構造に基づく機能分化）」と表現している[8)]。

1.3　デンマーク化の限界

ノルウェーの南の隣国デンマーク王国は海洋帝国であり、15世紀以来、デンマーク・オルデンブルグ朝（オレンボー朝）が北欧最大の領地を維持していた。1536年、デンマーク国王がノルウェーを属領にした。その時にはノルウェー人のかつての名門は衰滅していた。ノルウェーは、デンマークの北の属領に位置付けられ、スカンジナビア半島の北半分は「ノルウェー王国」と呼ばれた。ノルウェー人は自分たちの生ま

7）　Rolf Danielsen et.al., *Norway: A History from the Vikings to Our Times*, 注３）に同じ、Esp'.6 The Great Crisis,' 参照。

8）　Harry Eckstein, *Division and Cohesion in Democracy; A Study of Norway*, 注１）に同じ，Cpt.6.

れ育った領域としてこのノルウェー王国に愛着をもっていた。

ノルウェー王国はデンマーク王国と「一人の国王、一つの政府、一つの議会」を共有する「同君連合」であった。王冠も政府も議会もデンマークが独占していた。ノルウェー人の国王はおらず、ノルウェー政府はデンマークの首都コペンハーゲンから統治され、ノルウェー人が構成する議会はなかった。

デンマーク国王はノルウェーにコペンハーゲン風の教育・文化を広げようとし、デンマーク風の商業規制を行った。ただしノルウェーには封建制は根付かなかった。デンマーク国王はノルウェーを属領化したが、ノルウェー人が臣下としてデンマーク王に忠誠を誓い、それと交換に王から封土を与えられる制度は発達しなかった。デンマーク王権がノルウェー各地に置いたのは官吏（トップ以外はノルウェー人）であった。

また16世紀以降、聖職者の全国大の会議体も存在しなかった。ノルウェーに対してカトリック教は浸透度が低く、プロテスタント・ルター派によってはじめてほぼ全土がキリスト教化された。キリスト教会もノルウェー全体を統合する仕組みとしては弱体であった。

ノルウェーの都市は、海路を通じヨーロッパの都市間ネットワークのなす広域商業圏に組み込まれていた。そしてクリスチャニア（オスロの旧名）はデンマーク風、ベルゲンはドイツ風、トロンヘイムはイギリス風など、貿易の主要相手に応じて都市の雰囲気も多様であった[9)]。

デンマークとの「同君連合」になったことによってノルウェーが言語・文化面でデンマーク化が進んだかといえば、そうともいえなかった。たとえば、言語の面でも、行政用語・教会用語・教育用語など文語はデンマーク語化されたが、しかし、その影響力は限られ、口語として広く用いられたノルウェー語との間に溝があった[10)]。

このようにデンマークとの「同君連合」のもとにあった三百年弱の長い期間をかけて、デンマーク人とは区別されたノルウェー人の「われわれ意識」が培われた。ノルウェー人の間に、都市ブルジョワ（貿易商、海運業、鉱山業など）と官吏（Embetsmenn 大卒者が多い。）が、数が多くなり、裕福になり、かつ「ノルウェー人であることを明確に意識した」集団として台頭したのである。その社会層は法律家、教師などの職種に進出した。彼らは、ノルウェーの地に大学を設置すること、デンマークの銀行とは別のノルウェーの銀行を開設することを求めた。実際大学は1813年に、銀行は1814年に開設された。

また、彼らは自分たちを農民と異なる社会層を形成していると意識していたものの、

9） Stein Rokkan,'Dimensions of State Formation and National-Building:A Possible Paradigm for Research on Variations within Europe,' in Charles Tilly ed. *The Formation of National States in Western Europe*, Princeton University Press, 1975, pp.589-592.

10） ノルウェーの言語の変化については、Rolf Danielsen et.al., *Norway: A History from the Vikings to Our Times*, 注３）に同じ、p. 189参照。

「勤勉なノルウェーの農民」に敬意を抱いていた。そしてとくに18世紀半ば以降、ノルウェーとデンマークの差異、および「ノルウェー人」と「デンマーク人」との差異を強調するようになった。

デンマーク＝ノルウェーの「同君連合」は三世紀弱続いた。これだけの長期間にわたって徐々にノルウェー人の「我々意識」が醸成されたのである。

そして北米13州が英帝国から米合衆国として独立し、またフランス革命の影響からもう一つの隣国スウェーデンの民主化が進んだ。そしてノルウェーにも独立の意識が高まり、国民主権の願望が強まった。これらが1814年、ノルウェーの人々がデンマークとの「同君連合」から離脱を望む基底的な要因であった。[11)]

1.4　アイツヴォル憲法制定会議

1814年前半、ナポレオン帝国が崩壊した。ヨーロッパ大のナポレオン戦争はほぼ終わったが、しかし、政治秩序の混迷は頂点に達した。ノルウェーの二つの強力な隣国デンマークとスウェーデンとは、その巨大な時代な波に翻弄された。デンマークは敗者として沈み、スウェーデンは勝者として浮上した。デンマーク国王はスウェーデン王太子との戦いに敗れ、1814年１月キール条約を結び、ノルウェーをスウェーデンに譲り渡した。この瞬間、ヨーロッパの北方の辺境、ノルウェー人たちの独立の動きを抑えることが難しい権力の空白が生じていた。

権力の空白の瞬間を、ノルウェーの普通の人々はとらえた。1814年２月、広大で多様なノルウェーのほぼすべての行政区が、それぞれに代表選出の手続きを定めた。そして、実際に、二つの北辺行政区を例外に、行政区の民意を担った代表がアイツヴォルに派遣された。そうするようにデンマーク王太子がノルウェー各地区に命じたのである（後述）。1814年４月、ノルウェーの各行政区（北部辺境の２行政区を除く）から、112名の代表がアイツヴォル（首都から50キロの交通の要所）の裕福な商人・官吏カーステン･アンカーの私邸に集まった。

代表たちは、15名よりなる憲法起草委員会を設置した。すると、同委員会はわずか８日間で憲法草案起草を終えた。そして、代表たちは５章110条の憲法に調印した。さらに、ノルウェー議会＝ストルティングを定期的に召集することを決めた[12)]。彼らは驚くべき手際のよさを発揮し、ストルティングすなわち「国民主権の代行機関」を

11）Rolf Danielsen et.al., *Norway: A History from the Vikings to Our Times*．注３）に同じ、pp. 197−200。「同君連合」という半従属状態において、国民形成の萌芽が生まれて成長した点にノルウェーの特質がある。デンマークとの「同君連合」のもとでは、「我々ノルウェー人意識」を抱いたのは、少数の都市ブルジョワと官吏層であったが、1814年以降のスウェーデンとの「同君連合」においてより広い国民意識が顕著に発展する。Anne-Lise Seip, “Nation-Building Within the Union; Politics, Class and Culture in the Norwegian Nation-State in the Nineteenth Century”, *Scandinavian Journal of History*, 20(1995), 参照。

12）T.K.Derry, *A History of Modern Norway; 1814-1972,* Clarendon Press, Oxford, 1973, pp.5-9.

つくったのである[13)]。

1.5　共同体の代表たち

アイツヴォルの憲法制定会議に集まった代表たちは、大多数が貴族等の称号を持たない、身分的に普通の人であった。19世紀はじめ、ノルウェーには血統に基づく上層階層は事実上いなかったのである。

112名の代表の職業や身分は、さまざまであった。うち59人が官吏、軍人、聖職者であった。ただし、18人が商人と荘園所有者、そして自営農民37名も含まれている。共同体のなかの所有者層たちのなかから広い職種の人々が集まった。

代表の指導者役をつとめたのも、普通の人であった。カーステン・アンカーは、商人・官吏だが、私邸をアイツヴォル憲法制定会議の場所として提供し、デンマーク王太子にアドヴァイスした。そしてロンドンに派遣されて、リバプール内閣と野党と自由主義的な世論に働きかけ、「ノルウェー独立」への支持を求める活動をした。またゲオルグ・スヴェルドルップは、新設されたばかりの大学の図書館長で、人民主権論に基づく自由主義的な立憲王制を提唱し、絶対王政を志向するデンマーク王太子を牽制した。さらにクリスチャン・M・ファルセンは、治安判事・法律家で事前に憲法の原案を準備し、議長を務め、「ノルウェー独立のチャンピオン」的役割を演じた。爵位をもったヴェーデル・ヤールスバルグ伯爵もいて、彼の意見は聞かれたが、スウェーデンとの接近を望んだこともあり、その影響力は限られていた[14)]。

1814年４月、ノルウェー全土から代表が集まったこと、はじめてアイツヴォルの地で一堂に会した代表たちが結束したことに驚かされる。伯爵から農民まで非常に多様な人々を含んでいた彼らは、相互の対等性を重んじ、プラクティカルでビジネスライクな姿勢をとった。法律的なことばを用いても、誰もがわかる言葉で議論した。そして、決定が必要な事項を限定し、たとえ賛否が対立しても投票の結果を尊重した。憲法草案はすばやく書かれ、すばやく制定された。その憲法は、単純なことばで記され、110条の条文中過半の条項が一文で書かれていた。当時として最も民主主義的な内容

13）福田歓一は「人民主権は経験的には何らかの意味での機構化なしには作動しえないが、それは通常代議制による立法権の優位に落ち着いた」（福田歓一「主権」『平凡社大百科事典７巻』177頁。）と述べる。福田の鍵概念は国民主権の「代行機関」である。憲法は「国民に主権が存する」と宣言する。重要なものごとの決定者は、本来〈人民〉〈国民〉である。〈人民〉〈国民〉は抽象概念である。また、国民が全員参加して決定することが望ましい。人々が直接参加できるのは、古代ギリシャの都市国家、ヴァイキングの集会、日本の村の一揆など、少人数に限られる。国民の数は膨大である。その意見は無限に異なる意見および無意見からなる。国民を「主権者」と規定したところで、その国民が直接に決定を下す手続き・方法は、国民投票を例外として、恒常化できない。その結果、〈国民主権〉なるものの「代行機関」が不可欠となる。数ある機関のなかで、議会が台頭できたのは、それが「国民主権の代行機関」として認められたことによっている。

14）T.K.Derry, *A History of Modern Norway*; 注12）に同じ，p.6-7, p.3.

をもっていた。（改正を重ねて今日に至っている。）

憲法の制約下に置かれた世襲の立憲王制をとり、デンマーク王太子クリスチャン・フレデリクをノルウェー国王として規定した。また、ルター派を国教と規定した。そして、憲法のなかで、このアイツヴォル憲法制定会議の代表選出をモデルとして、ストルティングを置き、国民主権の代行機関を定期的に召集することとした。

なおアイツヴォル憲法制定会議と、その憲法が設置したストルティングとは、制度上の異なる機関である。ただし両者はともにストルティングと呼ばれることがある。

こうして国民主権の代行機関・ストルティングが置かれた。ストルティングは、ノルウェー人たちが、国民主権を主張する政治を行う主体性の確立を意味した。そして、「自由で独立し不可分なノルウェー王国」（憲法１条）へと至る道を拓いた。ただし、ノルウェー王国が、スウェーデンからの分離独立を果たすのは、その91年後の1905年のことになる。

ストルティング本会議場に掲げられた絵にもどろう。その舞台はアイツヴォル憲法制定会議の会場となったカーステン・アンカーの私邸のホールである。絵の主人公たちは、そこに集まった代表たちである。絵の中央で立っているのは議長ファルセンで、他の代表たちも、個性ある表情と多様な服装で着席している。この絵は、憲法を制定し、ストルティングを発足させた1814年５月17日（今もノルウェーの祝日）の瞬間を今に伝えている。

2.　二人の王太子の間で

では、なぜノルウェー人の普通の人々は、この1814年、急遽代表に選ばれ、一堂に会して憲法制定会議をつくり、驚くべきスピードで議事を進め、憲法と議会設立を定めたのか。この動きを、ノルウェーの人々の「我々はノルウェー人である」という意識の高揚に全て帰することはできない。そうなった理由としては、デンマーク＝ノルウェーとスウェーデンとが、1807年以降ナポレオン戦争という大戦乱に巻き込まれたことが重要である。

この過程では、ノルウェーの運命を二人の王太子が大きく左右した。ともにノルウェー人ではなく、普通の人々とはかけ離れた特別の人である。二人はノルウェーの隣国デンマークとスウェーデンの王位継承者であり、軍事指導者でもある。その一人は敗戦国デンマークの王太子で、格別な血統を誇るオルデンブルグ家のクリスチャン・フレデリクである。血統エリートである。

もう一人は戦勝国スウェーデンの王太子で、フランス平民の出ながら、戦乱の時代を軍事と行政の能力と才覚とによってなり上がったナポレオン帝国の元帥の一人ジャン・バプティスト・ベルナドットであった。彼は、スウェーデン議会によってスウェーデン王太子（国王の継承者）に推戴され、それを受け入れてカール・ヨハンと改名した。業績エリートであり、スウェーデン議会によって選出された王太子である。

血統エリートと業績エリートとは、ノルウェー王国の王位をめぐって競い合い、戦争したのである。

2.1　ノルウェーはもの言えぬ家畜のように譲り渡された

デンマークとスカンジナビア半島は、1807年以降、ヨーロッパ全体の運命を根底から変えた国際的な危機に直面した。ヨーロッパ大陸の上から下への全階層を貫き、また中心から周辺に至る自由主義的な抵抗・反乱が渦巻いた。そしてナポレオン戦争の戦乱の果てに秩序が崩壊した。

ナポレオン戦争期の国際政治は極めて暴力的である。軍事的な勝敗が、その勝者・敗者の運命を決め、さらに、戦いとは無関係であった人々の運命を決めてしまう。デンマーク王国では、首都コペンハーゲンが海からイギリス海軍に攻撃され、陸からはナポレオンの陸軍に南から圧迫された。ナポレオンの大陸封鎖政策によって、穀物を輸入に依存するノルウェーでは海上輸送が途絶え、飢饉が生じた。

1813年ナポレオン軍は、ロシア・イギリス・プロイセン・スウェーデンの連合軍に敗れた。天下分け目の戦いで、一方のスウェーデン王太子は反ナポレオン連合の一角を担った。他方のデンマーク国王は、ナポレオンと最後まで同盟を続けた。そしてナポレオンの敗戦によって、デンマーク王国もまた敗者の立場に追い込まれた。第一の対立軸はナポレオン軍対反ナポレオン同盟国軍であることは疑いない。

しかし、一皮むけば反ナポレオン同盟国間にも冷徹な現実政治が貫徹している。勝利者同盟は流動的であり、その内部に利害対立軸が潜在していた。ロシア・スウェーデン戦争によって1809年ロシア皇帝はスウェーデンからその属領のフィンランドを割譲させた。そしてロシア皇帝は同盟国となったスウェーデン王太子に、フィンランドを奪った替わりとして、ノルウェーをスウェーデンに与えると約束した。スウェーデン王太子カール・ヨハンは、ロシア皇帝の申し出を受け入れるよりほかに選択肢はない。

たしかにスウェーデンにとってスカンジナビア半島の統一は悲願ではあった。スウェーデン王太子カール・ヨハンにとって、一方でフィンランドをロシアに割譲させられたことは事実であるが、しかし、スウェーデンがノルウェーを獲得できる保証は一切ない。そのため、スウェーデン王太子は、ライプツィヒの戦いでナポレオン軍を破ると、すぐさま軍隊をデンマークの南部国境地帯に進攻させた。そして敗者の側に立ったデンマークから、軍事力にものをいわせ、様々の交換条件をつけた上で、ノルウェー王国をスウェーデンに割譲させたのである。

1814年１月14日、スウェーデンとデンマークの間でキール条約が結ばれた。そこに、ノルウェー王国はデンマーク国王からスウェーデン国王に割譲されると明記された。

その事態に直面して、ノルウェーの人々の間に独立の精神が高揚した。ノルウェーの都市ブルジョワや官吏 Embetsmenn は、歴史家 T.K. デリーによれば「物言えぬ家畜

のように新しい所有者に引き渡されることを拒絶した。…またノルウェー自作農は、スウェーデン人地主が土地支配する恐れがあり、スウェーデン政府がデンマーク農民に厳格な徴兵制を敷くことを恐れた。」[15)]

2.2　デンマーク王太子クリスチャン・フレデリク

デンマーク王太子クリスチャン・フレデリク1786 - 1848は後のデンマーク国王クリスチャン 8 世（在位1839 - 1848）である。国王フレデリク 6 世の従兄弟（フレデリク 6 世の父の異母弟の子）であり、国王に男子継承権者が生まれないという条件付き王位継承者 hair presumptive であった。ヨーロッパ屈指の家系オルデンブルグ家の血統という正統性をもつ。同家は15世紀から近代まで続き、多くの国々の王・王族を輩出している。

クリスチャン・フレデリクの1814年の行動はノルウェーの運命を大きく変えた。彼は、ノルウェーの人々に憲法と議会をつくることを促し、新たに制定されたノルウェー憲法によりノルウェー国王に推戴された。ライバルのカール・ヨハンがスウェーデン議会から推戴された前例を追ったのである。ノルウェー国王位に関して彼がカール・ヨハンの先手を打ったことは疑いない。（デンマーク国王フレデリク 6 世は、血統の上からはスウェーデン王位の継承権を主張しうる地位にあったものの、スウェーデン議会はフランスの平民出身の業績エリート・カール・ヨハンをスウェーデン王の後継者に推戴したのであった。）

このデンマーク王太子は変動期の王族にありがちな、矛盾に満ちた行動をとった。たとえば一方ではアイツヴォル憲法制定会議の過程でその内容を絶対王政にふさわしいように誘導しようと試み、他方ではアイツヴォル憲法が制定された後は、その自由主義的憲法を守ろうともしている。この王太子が1814年ノルウェーの運命に果たした役割は、国王フレデリク 6 世のノルウェーに行った配慮とともに、今日歴史家たちの論争の的になっている[16)]。

15）Ibid,.p.5.

16）Michael Bregnsbo, "The motives behind the foreign political decisions of Frederick VI during the Napoleonic Wars," *Scandinavian Journal of History* (2014) Vol.39,No.3, pp 335-352、H.Arnold Barton, *Scandinavia in the Revolutionary Era, 1760-1815*, Minneapolis 1986. クリスチャン・フレデリク（後のデンマーク王クリスチャン 8 世）の両義性は三点に要約できる。第一に、ストルティング特別会によって現国王の退位と新国王の即位を決定するというアイディアを彼が認め、乃至推奨したが、それはなぜかという点である。後に彼がデンマーク王クリスチャン 8 世となった時の非立憲的、反自由主義的な王権運営と矛盾する。第二に、「ノルウェー王国の独立」に関して、デンマーク・オルデンブルグ家のためにノルウェー人たちの独立運動を利用しようとしたのか、それとも、ノルウェーを愛し、その独立を望んでいたため「ノルウェー王国の独立」を主張したのか。第三に、スウェーデンとのモス議定書交渉において、アイツヴォル憲法の改憲による自らの退位を支持した理由は、アイツヴォル憲法を維持することがノルウェーにおけるスウェーデン国王の権限を低めるためか、

デンマーク王太子の行動の概略は以下の通り。彼は、1813年５月国王によって国王代理 stattholder としてノルウェーに派遣された。彼の任務はノルウェーの人々のデンマーク国王とオルデンブルグ家に対する忠誠心を高める点にあった。

ところが上述のようにデンマーク国王はスウェーデン王太子との戦いに敗れ、1814年１月キール条約を結び、ノルウェーをスウェーデンに譲り渡した。キール条約からすれば、デンマーク王太子クリスチャン・フレデリクはノルウェーからデンマークに帰国しなければならない、はずであった。

ところがキール条約に反して、王太子クリスチャン・フレデリクは、ノルウェーに残った。国王が調印したキール条約を遵守しないどころか、この王太子は、ノルウェー人たちのナショナリズムを高揚させて、ノルウェーを独立させ、彼自身が、新しい独立王国ノルウェーの国王となろうとした。彼はイギリスが自由ノルウェーの独立を支援してくれるものと期待を寄せたが、しかしイギリスは同盟国スウェーデン国王にノルウェーを領有することを認めていた[17)]。キール条約の合意に反してデンマーク王太子が「独立ノルウェーの国王になろう」とする試みは、1814年の国際情勢からして、当時のほとんどすべての人々にとって無謀に見えた。

ただしこのデンマーク王太子の行動は、ノルウェーの人々にとって、オルデンブルグ家に反乱することなく、ノルウェー独立に向けて行動する絶好機を作り出した。すくなくとも外見上、ノルウェーを300年統治してきたデンマーク王権が、ノルウェーをめぐって国王フレデリク６世と王太子クリスチャン・フレデリクの二つに割れたように見えた。一方、国王はキール条約をスウェーデンと結び、ノルウェーをスウェーデンに譲渡した。他方、同条約に抵抗するデンマーク王太子は「ノルウェー王国」の独立を訴えたからである。

デンマーク王太子は、ノルウェー各地を巡幸するなか、２月16日、アイツヴォルのカーステン・アンカーの私邸で、21人のノルウェーの人々と接見し、その意見を打診した。そのノルウェー人たちは、王太子の抵抗に「独立ノルウェー」に向けて加速する動きを発見し、彼と共同歩調をとった。

ただし、きたるべき独立ノルウェーの体制については対立が生じた。クリスチャン・フレデリクは目指すべき独立ノルウェーの体制として絶対主義的王政を主張した。それに対しノルウェーの普通の市民たちは、自由主義的な立憲王制を主張した。

そしてノルウェー人たちはこう主張した。たしかに、キール条約は、それに調印したデンマーク国王とその王太子を拘束するはずである。ただしキール条約に調印していないノルウェーの国民を拘束しない、カーステン・アンカーはクリスチャン・フレデリクに、デンマーク王太子ではなく「ノルウェー王国摂政」を名乗れとアドヴァイ

それとも彼が立憲的自由主義のもとの国王制度を望ましいと考えていたためか。

17）T.K.Derry, *A History of Modern Norway*, 注12）に同じ．pp. 8-9.

スした。そしてクリスチャン・フレデリクが「ノルウェー王国摂政」の名において、ノルウェーの憲法制定会議を招集した[18)]。

その結果が1に述べたアイツヴォル憲法制定会議であったのである。1814年4月10日、先述したアイツヴォルのカーステン・アンカーの私邸で、憲法制定会議が始まった。5月17日、ストルティングに掲げられた絵の通り、独立ノルウェーの憲法を制定し、立憲自由主義な王制を定め、クリスチャン・フレデリクをノルウェー国王に選択した。

クリスチャン・フレデリクは憲法の内容に関して、ノルウェーの人々の意志を受け入れて譲歩する。そして「独立した国民であり、自由な憲法をもとうとするノルウェー国民の意志」を承認した。王太子にとってノルウェーの人々によってノルウェー国王に推戴されることが目的であったからである。

この結果、キール条約に反して、また外見上はデンマーク国王の意志に反して、なによりノルウェーを属領とするはずのもう一つの強力な隣国スウェーデンの意図に反して、ノルウェーは独立した立憲自由主義の王国となった。これは決定的な第一歩である。この過程を導いたのは、ノルウェーの普通の人々の「自由なノルウェー」に向かう意志と、オルデンブルグ家の血統エリート・クリスチャン・フレデリクのノルウェー王国の国王になろうとする政治的作為のつくりだしたシナジーの結果であった。ただし、この状態は長くは続かない。

2.3　スウェーデン王太子

視点をもう一人の王太子に移す。スウェーデン王国の王位継承者兼摂政（以下王太子と略記する。）カール･ヨハン1763－1844である。後にノルウェー国王となったときの名はカール3世ヨハン、スウェーデン国王名はカール14世ヨハンである。

カール・ヨハン王太子、後のスウェーデン国王兼ノルウェー国王の出自はフランス・ポーの平民ジャン・バプチスト・ベルナドットである。フランス革命期には彼はラディカルな自由主義者であった。彼が1844年スウェーデン王カール14世ヨハンとして死んだ時、「その胸には若き日の思想を物語る「王たちに死を」という入れ墨があったという。」[19)]フランスの平民からスウェーデン国王へと飛躍的な階級上昇をなしとげたベルナドット＝カール14世ヨハンのアイロニカルな印である。

ベルナドットは、軍人および行政官としての才能を発揮して台頭し、ナポレオンから元帥の位を与えられた。ナポレオン戦争期、もっとも劇的に社会階層の上昇を遂げたのはナポレオン自身と彼の26名の帝国元帥たちであった。ベルナドットは、気質的

18）Ibid., pp.6-7.
19）相良匡俊「ナポレオン帝国の元帥たち」『週刊朝日百科　世界の歴史103』朝日新聞社、1990年11月11日、C649頁。

には繊細で思慮深く、軍人・行政官として際立って有能であった。彼自身が戦争と行政の能力と業績によってなり上がったことを心底自覚した近代エリートであった。

ベルナドットはナポレオンの兄ジョゼフの妻の妹と結婚した。彼は全盛期ボナパルト家と縁戚関係をもった軍事エリートであった。しかし彼はたえずナポレオンとは距離をとり、独立した判断によって行動した。

この興味深いフランス軍人を、日本人の王室観からは驚くべきことに、スウェーデン議会が同国の王位継承者として推戴したのである。彼はこれを受け入れ、プロテスタントに改宗したうえで、2010年、スウェーデン国王カール13世の養子となってカール・ヨハンと改名し、スウェーデン王太子になった。

この元フランス元帥ジャン・バプチスト・ベルナドット、現スウェーデン王太子カール・ヨハンは、対ナポレオンの同盟者であるロシア皇帝との間で、フィンランドとノルウェーの交換に合意していた。彼は1813年10月ライプツィヒの戦いで、ロシア、イギリス、プロイセンの三国と同盟して、ナポレオン軍を打ち破った。勝利の立役者の一人がカール・ヨハンであった。

ロシア、プロイセン、イギリスの三国の兵力はナポレオン軍を追ってフランスを目指した。ところがカール・ヨハンは、1813年11月、自らの軍隊を北に向けてホルスタインに進攻した。そしてデンマーク軍を敗走させ、1814年１月デンマークとキール条約を結び、デンマーク王国からノルウェー王国を割譲させた。ロシア皇帝がスウェーデンに向ってなした約束を、自らの軍事力を使ってデンマークと戦争して勝つことによって実現した。

ただしカール・ヨハンは自らの軍事力の限界を知っていた。キール条約のなかで、ノルウェーを「ノルウェー王国」と表記し、また、ノルウェー王国が譲渡される先はスウェーデンではなく、「スウェーデン国王」と表記して、ノルウェーを他の割譲された領域とは区別して表記して、「ノルウェー王国」に対する尊重を表現している[20)]。

そのうえでカール・ヨハンは自らの兵力を西に向けて1814年４月にはパリの北方に陣取った。このカール・ヨハンとスウェーデン軍の動きはナポレオンの死命を制した要因のひとつであった。軍事的な能力と業績に基づくナポレオンの近代帝国を崩壊させたのは、おなじ能力と業績によってなり上がったナポレオン帝国の元帥たちであった。ナポレオンは1814年４月、エルバ島に流された。

この瞬間までカール・ヨハンは、ナポレオンとの戦争やデンマークとの戦争のため、戦場から戦場へと忙しく走り回った。この有能でプラグマティックな軍人王太子は、業績エリートの常としてたえず忙しい。その裏面として、カール・ヨハンは、独立に動いたノルウェーに対し対処できなかった。

裏をかえせば、アイツヴォル憲政会議は、権力の空白期間をついて開催された。

20）Rolf Danielsenn et.al., *Norway: A History from the Vikings to Our Times*, 注３）に同じ、p. 212。

1814年５月には、デンマークは敗北し、カール・ヨハンはナポレオンの死命を制するのに忙しかった。そのわずかな時間的隙間に、ノルウェー人代表が急遽アイツヴォルに集まり、非常に短期間で「独立ノルウェー」の憲法を作り出した。

1814年夏になってようやく、カール・ヨハンは、軍隊をスウェーデン・ノルウェー国境の一帯に集結させた。ノルウェー軍も国境付近の要塞にたてこもった。そして７月26日、スウェーデン・ノルウェー戦争が勃発した。戦闘は、ノルウェー南東部の国境地域で約二週間続いたが、ノルウェー軍は敗走した。８月14日、休戦協定であるモス議定書が結ばれた。

休戦交渉に派遣されたノルウェー代表は譲歩することが不可避であると判断して、スウェーデンとの間のモス議定書では以下の妥協に達した。

① ノルウェー代表は、スウェーデンとの同君連合を受け入れた。もしも受け入れなければ、戦争が続いて不利な状況に追い込まれると考えたのである。その反面、カール・ヨハンに、５月17日に確立したノルウェーのストルティングを中心とした立憲自由主義体制とアイツヴォル憲法が有効であると認めさせた。

② カール・ヨハンは、ノルウェー王国がスウェーデン国王のもとで同君連合となること、およびクリスチャン・フレデリクをノルウェー国王から退位させることを同意させた。彼はキール条約の中核部分のみを守ることで満足した[21)]。

なぜ戦争に勝利したスウェーデン王太子カール・ヨハンは、戦争に敗れたノルウェーに譲歩したのか。

時は1814年８月である。25年間のヨーロッパ大動乱をへた欧州には、かつてあった秩序はなにもない。

全盛を極めた業績エリートの代表格ナポレオンでさえ没落した。とすれば一介のフランスの将軍ベルナドットからスウェーデン王位継承者・摂政カール・ヨハンにまでなり上がった彼自身もより容易に凋落する可能性があった。

かといってヨーロッパに新しい秩序が到来する見通しもない。ポスト・ナポレオンの行方は定かでない。カール・ヨハンは、彼に冷淡なメッテルニヒが仕切るウィーン会議の正統主義を乗り切らなければならない。さらにこの先には1815年のナポレオンの百日天下がある。カール・ヨハンという存在も王太子の地位も剣の刃に乗ったように不安定なものと意識したことであろう。

昨日までの同盟国ロシアとイギリスが明日の友であるとは限らない。ロシアもイギリスも、スウェーデンが強くなりすぎることは望まない。とくにイギリスは、スウェーデンにノルウェーを与える、という約束は守る。すなわち、「独立ノルウェー」は夢であって、デンマーク王太子をノルウェーから撤去させる。とはいうものの、スウェーデンとの「同君連合」のなかで「アイツヴォル憲法は永続的な存在にする」とい

21）T.K.Derry, *A History of Modern Norway*, 注12）に同じ、pp. 10−16。

う妥協案をしめし、外交官 J.P. モリアをノルウェーに派遣していた[22]。

ヨーロッパ状勢の不確定さのなかで、業績エリートには成功のチャンスと凋落の危険とがともにある。カール・ヨハンのプラグマティズムが彼を譲歩させた。

カール・ヨハンは、もしもアイツヴォル会議のつくりだしたノルウェーの体制を否定すると、それが引き金になって、かえって手に入りかけたすべてが、手のひらから滑り落ちる混乱を招きかねないことを恐れた。ノルウェー臣民に向かって協調姿勢を示して彼らの歓心を買っておけば、これから君臨することになるノルウェー支配を安定させられると計算したのである。また、ノルウェー議会の立憲自由主義を受け入れれば、イギリスを満足させられるし、彼のフランスとスウェーデンにおける支援者たちからも支持されることになろう。スウェーデン王太子カール・ヨハンは、安定を求めて「ストルティングを中心とした立憲自由主義体制とアイツヴォル憲法が有効である」というノルウェー代表の主張に妥協した[23]。ノルウェーの自由な議会体制への第二歩である。

2.4　国民主権の「代行機関」は何をなしえたのか

外交的妥協の果てにノルウェー人代表たちには問題が残った。課題は、一方でノルウェー議会の自由な体制を維持しつつ、他方でカール・ヨハンが満足するようにキール条約の中核を守ること、これである。すなわち、今国王に決めたばかりのクリスチャン・フレデリクを退位させ、スウェーデンと同君連合を結ぶには、どうすれば法律上の整合性がとれるのか。

つくられたばかりのストルティングこそが問題を解く鍵であった。ノルウェー国民の「主権の代行機関」の立場を維持しつつ、唯一の立法機関にふさわしい法的手続きを運用する必要があった。

その鍵となったのは、ストルティングがその議決によって、つくりだしたばかりの憲法を改正することである。モス議定書のノルウェー側の交渉者は、スウェーデン側に対して、ストルティング特別会を開催し、その議決によって、クリスチャン・フレデリクを退位させ、アイツヴォル憲法をスウェーデンとの同君連合を結ぶように改正する、と約束した。

10月初旬、オスロでストルティング特別会が開催された。5月17日にノルウェー国王となったクリスチャン・フレデリクは、すでに失意のうちにデンマークに帰っていた。しかし、ストルティングは、休戦協定（モス議定書）の（スウェーデン側の）了解に反し、次の国王を定めるまでの一ヶ月間、クリスチャン・フレデリクの退位を認めない。彼の退位を決めるのはストルティングの憲法改正によるのであって、国王の

22）Ibid., p.9.
23）Ibid., p.13.

意志ではない。

2.5　連合王国法

11月４日、ストルティングはアイツヴォルで制定した憲法を改正し、また、連合王国法（Act of Union）を定め、スウェーデン国王カール８世を国王に選出・承認した。キール条約の基本部分を維持するというスウェーデンの主張と両立させつつ、ストルティングは、自らの議決によってノルウェー王国をスウェーデン国王との同君連合の下に置いた。対外的な主権をスウェーデンに譲っても、あくまで「ノルウェー国民の主権の代行機関」である議会の立場・手続きを貫いたのである。

そして、同時に、ストルティングは休戦協定（モス議定書）の（スウェーデン側の）了解に反し、唯一の立法機関として、ノルウェーの通貨発行権、ノルウェー船がノルウェー旗を掲げる権利、そして、ノルウェー人の兵役義務を限定する法を定めた。ノルウェー人の兵役義務の限定は、スウェーデン国王の持つ戦争布告の権限を制限する一定の効果がある。この1814年の曲折にみちた政治過程の結果、ノルウェー人たちは、スウェーデンの同君連合の下に置かれ、対外的な主権の大部分を放棄した。この譲歩は不可避だった。

議論は**図1**のように要約できる。

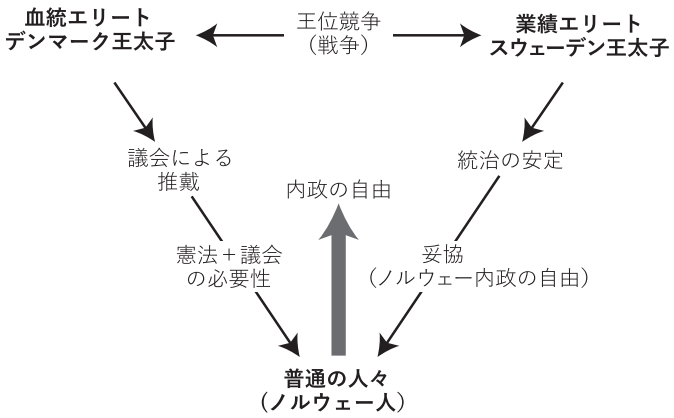

図1　ノルウェー議会政の形成（筆者作成）

政治アクターは三つである。第一は、ストルティングに選出されたノルウェーの普通の人々、第二は、デンマークの血統エリートである王太子、第三は、スウェーデンの業績エリートである王太子であった。二人の王太子はノルウェー王位をめぐって、戦争し、競い合った。

デンマークの王太子はもはや血統エリートの正統性は限界があることを認識していた。そのためノルウェー人たちに憲法と議会をつくらせて、彼らによってノルウェー

国王に推戴されることを目指した。政治的に成功の見通しのない企てであった。しかし血統エリートであるクリスチャン・フレデリクは、たとえ政治的に失敗しても、血統というエリート属性は変わるところがない。（実際、後にデンマーク国王となっている。）また彼がノルウェー人たちに「独立したノルウェーや自由主義的な議会」を許しても、ノルウェーをスウェーデンに譲り渡すよりはましであった。この血統エリートの無謀とも言える企てのなかで、ノルウェー人たちは「自由主義的な議会体制」を確立できた。

他方、スウェーデン王太子は、業績エリートの常として日々忙しさのなかに生き、そのため、ノルウェーの普通の人々に憲法と議会をつくる空白期間をあたえた。また、カール・ヨハンには、一つの失敗が引き金となって築き上げてきたすべてを失う危険がつきまとっていた。そのため、すばやい妥協を余儀なくされた。

その結果、ノルウェーは、国内的な主権の代行機関としてストルティングを確立し、内政上の自主的決定権を勝ち獲った。ついで、その結果、デンマークに「一人の国王、一つの国事会議、一つの議会」を独占された同君連合から、スウェーデンとの間で「一人の国王」に関しては譲ったものの、「二つの国事会議、二つの議会」をもつ同君連合に代えたのである。「国民主権の代行機関」として議会が存在することのが、そして法を定めそれを改正するテクニックが、何をなしえたか、そして何をなしえなかったか、を明らかにしている。

1814年暮、スウェーデンを訪れたストルティング特別会の議長・ヴィルヘルム・F・K・クリスティー（治安判事で、アイツヴォル会議の書記役。）は、ノルウェー国民を代表し、うやうやしくスウェーデン国王閣下の前に歩み出て、そして、居並ぶスウェーデンのお歴々の方に振り返り、次のように述べた。

「皆様は兄弟の手を差し伸べられました。それを私たちノルウェー人は正直な握手をもって握り返しました。この手をわたしたちは永遠に引っ込めることはありません。[24)]」

3.　むすびにかえて　二度の国民投票

3.1　「一つの国王、二つの国事会議、二つの議会」

スウェーデン・ノルウェー連合王国の「一つの国王、二つの国事会議、二つの議会」は、いかに運用されたのか。以下要約しておく。

「一つの国王」とは何か。ノルウェーの観点から見ると、ノルウェー国王はスウェーデンにいた。ノルウェーには、スウェーデン王太子が住んで国王を代理する、とされた。

24）T.K. Derry, *A History of Modern Norway*, 注12）に同じ、p. 16に引用。

「二つの国事会議」とは何か。国事会議とは大臣たちから構成される内閣に相当した。それはスウェーデン王国のものが一つ、ノルウェー王国のものがもう一つあった。ノルウェー王国の国事会議のメンバーは半分がスウェーデンの首都ストックホルムに、もう半分がノルウェーの首都クリスチャニア（現在のオスロ）にいた。

ノルウェー王国の国事会議の権限は、アイツヴォル憲法と連合王国法によって規制されていた。そして大臣に相当する国事会議メンバーはノルウェー人が任命されるが、スウェーデン国王によって選ばれ、国王に責任を負う官僚に位置付けられた。

「二つの議会」とは何か。スウェーデン議会だけでなく、ノルウェーにストルティングがあった。ノルウェー人の手によってノルウェー人の議員が選ばれてノルウェーの首都にあった。ただし、ストルティングの議決はすべて法律になるわけでなかった。

国王は、憲法上の権利としてストルティングの議決に拒否権を発動できた。ストルティングは同じ法案を三回可決しないかぎり、王の拒否権を覆せなかった。この国王の拒否権とは、事実上国事会議の大臣の拒否権であった。また、国王が任命・信任するノルウェーの大臣を、ストルティングが罷免する権限はなかった。議会に拒否権をもち、議会でなく国王に責任を負う官僚である大臣たちは、ストルティングに対して超然たる態度をとり続けることができた。

視点をノルウェーに限ろう。「国王プラス国事会議対ストルティング」の権限関係は、米国における大統領プラス省庁対連邦議会の権力分立に類似する。ただし次の二点で大きく異なっている。第一に、国王（アメリカ大統領に相当する）が隣国に住み、任期をもたず、さらに世襲する点で、米国の権力分立とは異なっていた。ノルウェーの立憲議会制とは、いってみれば「世襲の終身大統領制であって、しかもそれが隣国にいる」と形容しても大きく間違ってはいない。

第二に、国事会議は国王に向って責任を負っていた。この立憲議会制では、ストルティングが国王とその政府に優位しているわけではない。ストルティングの法律を制定させる権限と国王の拒否権とがたえず対立し続けた。

3.2　議会改革

この対立状態のなかでストルティングは、国民の意志を背景に改革を試みた。ノルウェー議会の能力発揮には三つの波がある。

第一の波は議会を毎年開催せよ、という要求であった。開設当初の議会の会期は極めて短かった。3 年のうち 3 ヵ月 1 回に限定されていたのである。残りの 2 年 9 ヵ月は、閉会しているため、議会は活動できず、行政に対する監視も弱まってしまう。そこで毎年議会を開く法案が、12年も提案され続けて、ついに国王の拒否権を覆し1869年に成立した。

第二の波は議員提出法案の増大である。毎年活動し続ける議会は、国民の関心を引きつけた。また、国王・国事会議に対抗する政党が、ストルティングで多数の議席を

確保するだけでなく、国民を組織化し始めた。それがさらに議員の立法活動を飛躍的に増した。1870年代には年平均の政府提出法案が80件であったのに対し、議員提出法案は144件であった。その数は1880年代には、それぞれ86件と247件に変化する。議員提出法案が約70％増え、政府提出法案の３倍に達した。このことは、国事会議対議会の間のバランスが、後者に傾いたことを示す一指標である。ストルティングの国事会議に対する影響力が増したのである。

第三の波は大臣たちが議会のメンバーとして編入する法律（Inclusion Bill）である。同法は王の拒否権にあってきたが、1877年には、それをストルティングで三回目に通すことによって国王の拒否権を覆した。そして、1880年には、大臣たちに対して、議会に編入された裏面として、議会の決定に対して拒否権を発動すべきでないことが憲法原理であると認めよと迫った。これは国事会議を、議会の国王に責任を負うのではなく、ストルティングに責任を負う議院内閣制に転換させる根本的な改革要求であった。それに対して国王は抵抗し続けたが、1882年選挙がはじめての政党選挙となって改革派が勝利した。1884年、国王は万策つきて、改革派で議会多数派を率いるヨハン・スヴェルドルップを首相に指名した。

3.3　分離独立の国民投票

1814年暮、ストルティング特別会議長がスウェーデン国王の前で「永遠に引っ込めることはありません」と述べた「ノルウェー人の手」は引っ込められる。言葉の91年後の1905年のことである。

同君連合下のノルウェーには外交権がなく、スウェーデン政府が外交権も領事業務も握っていた。とくに領事業務は日常的に係争をもたらした。なぜならノルウェーは海の国であり、海運･漁業・造船・貿易で活動するノルウェー人の海外活動をめぐって、ノルウェー人とスウェーデン政府の出先機関の間で摩擦が絶えなかった。

その克服のため、ノルウェーのスウェーデンからの分離独立が目指された。その機会は、1905年東方の大国ロシアにおける革命状況がもたらした。その機をとらえ、ノルウェーの首相クリスチャン・ミケルセンは、スウェーデンとの同君連合の解消の是非を問うため、国民主権の切り札である国民投票を実施した。85％のノルウェー有権者が投票して、2000対１で「同君連合の解消」を支持した。そして緊張した交渉をへて、スウェーデン国王とスウェーデンの社会民主党政権は、ノルウェーの分離独立の要求に譲歩し、たえず抑制的に行動した。1905年10月26日スウェーデン王オスカル２世（カール・ヨハンの孫）はノルウェー王位を放棄した。ノルウェーは、隣国からの分離独立をようやく達成した。

3.4　国王制度の廃止か継続か

しかしノルウェーのドラマは終らない。ノルウェー人たちは、もう一つの難問に直

面した。同君連合を解消した後、国王制度を廃止するのか、それとも継続するかを選択することが不可避な問題として残されたからである。

一方で、国王制度の廃止を求める勢力（「共和主義者」と呼ばれる。）は根強かった。他方で、首相と外相は、国王制度の継続を望み、新国王の候補として、デンマーク皇太子の次男カール（1814年に失意のうちにノルウェーを去ったあのデンマーク王太子クリスチャン･フレデリクの妹のひ孫。）と下交渉を進めていた。

この時点でノルウェーは国民主権をもった王国であり、国王は主権者ではない。しかし、国王は、長い伝統をもつ制度であり、重要な機関であり、象徴的存在であった。では、どんな手続きをとれば国王という制度の有無について、国民の納得をえられる決定ができるのか。

再び国民主権の切り札である国民投票がなされた。政府は、まず、第一に、ストルティングに対し国民投票にかけることを提案し、ストルティングは国民投票法を87対29で可決した。そして、第二に、国民投票では有権者75％が投票し、4 対 1 で国王制度の継続が支持された。第三に、国民投票の結果をストルティングは満場一致で承認した。議会から出発し、国民自身が投票を行い、そして、その結果を受けて議会が満場一致で決定した。決定の主体はグルリと一回転し、その始点と終点なったストルティングは「国民主権の代行機関」の役割を全うした。

3.5　国民主権的な国王制度

国王候補に擬されていたカールが国民投票という手続きを望んでいた。国王制度の継続が選択されたことを受けて、カールは国王就任を受諾し、ノルウェー国王「ホーコン 7 世」というヴァイキング時代のノルウェー王の名を受け継いだ。彼の 2 歳の息子も同様に「オラヴ」とノルウェー風に改名して王太子となった。そして、ストルティング議員たちの前で憲法遵守を誓い、ノルウェー国民に迎えられ、翌1906年にトロンヘイムの大聖堂で戴冠式を行った。

最も国民主権的な手続きによって選択された国王制度の誕生である。

誤解を避けるために一言しよう。この1905年に問われたのは、ノルウェーの内外で、ときに「王制」と「共和制」の間の選択と呼ばれる。ただし、アリストテレス以来政体を「王制」「寡頭的貴族制」「民主制」に三分類し、そのいずれが望ましいか議論されてきた「王制」対「共和制」の間の選択ではない。ノルウェー国民が選択したのは、国王が主権者である「王制」ではない。議会制民主主義の体制のもとで、憲法の定める機関として国王制度を維持することである。それを立憲君主制と呼んでもいい。議会の議決によって国民投票を行い、その結果を受けて議会が満場一致で議決する手続きは、考えられる最も国民主権的なものである。今後、同じ手続きを経るならば国王制度は廃止できる、と了解されている。

この国王制度における国王の活動は、民主主義と一切矛盾しないし、また、後のナ

チス・ドイツによるノルウェー占領中、国王と王太子とは、断固として民主主義の理念を奉じ、国民主権を維持する戦いの側に立った。国王制度は、ノルウェーの国民主権・民主主義に基づき決定されることによって、その一部になったのである。

Establishment of the Norwegian Parliamentary Democracy in 1814: Competition of Christian Frederik and Carl Johan to Gain Control of the Crown

NAKAMURA Ken-ichi

Abstract

Robert A. Dahl and other political scientists have pointed out that Norwegian parliamentary government is one of the most stable democracies in the world. Storting, the supreme legislature of Norway, was established at the constituent assembly at Eidsvoll in 1814. The establishment of the Norwegian constitution was the most important legacy of 1814. This essay illustrates the reasons and the process by which the 112 representatives at Eidsvoll were able to establish the parliamentary democracy in 1814. The constitutional assembly of 1814 faced extraordinary challenges such as the final stage of the Napoleonic War and turmoil in the European political order. To constitute a new political order in Norway, the Norwegian representatives needed not only authority to legitimate themselves, but also power to guarantee their newly established political regime. Unfortunately, the most important players of the Norwegian democracy were neither equipped with adequate authority nor enough power. At this critical moment of change in Norwegian politics, two foreign players stood out -- Christian Frederik and Carl Johan, who competed with each other to gain control of the Norwegian Crown. Christian Frederik, Crown Prince of Denmark-Norway had the authority over Norwegian people and could initiate to establish the constituent assembly at Eidsvoll. Carl Johan, the former French marshal named Jean Baptiste Jules Bernadotte, was elected by Swedish parliament as heir to the Swedish throne. He had shown remarkable military skills and administrative capabilities. This essay notes the two historical factors, which contributed to establish the Norwegian parliamentary democracy. First, the synergy of the liberal nationalism of Norwegian representatives alongside the ambitious initiatives of Christian Frederik, and second the compromises between the Norwegian representatives and the cautious pragmatism of Carl Johan.

Keywords

Storting, parliamentary democracy, Christian Frederik, Carl Johan, and the Norwegian Crown